

子どもと民話

おばあちゃんのはなし

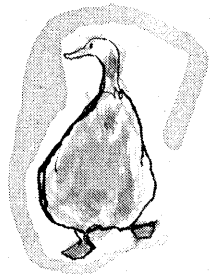
山形県の農村で、いろりのまわりにこしをおろし、おばあちゃんからきいた「むかし」、また、群馬県の山村で、暗い電球の下で、こたつに入りながらきいた、おばあちゃんの「むかしあつたげな」の話、方言が入って、その一つ一つのことばはわからなくとも、「ヘエ」とか「フン」とか、その地方でつかわれていたあいのでを入れて話を聞くと、語っているおばあちゃんの話にリズムがでてきて、楽しい音楽になって、私の耳に入ってくるのです。そして、とても心が安まるのです。

なぜでしょう。

都会で、毎日公害のきかない空気をすったり、交通戦争のまんな中にあるからではないと思うのです。

語りてのおばあちゃんと聞きての私たちが語りとあいのので一つになって、人間と人間がふれあつてできる、語りの芸術の

中村博



中にとけこんでいるからだと思うのです。

おばあちゃんの語りは新劇の俳優さんのようにうまく語ってはくれません。だが、その土地にながく住みつき生活してきた者のみができる生活の中から語らなくてはいられないものがあるように思うのです。だからこそ、私の心をうち、心をやすめてくれるのです。

文字も文章もうまくかけないおばあちゃんが、それこそ、先祖から何百年も継承されてきた話、それはその土地に生きている生物と同じ、いや、人間の歴史そのもののような重さを感じさせるのです。

わらべうた

あるところで、わらべうたを研究している人たちが集つてるところがありました。二人がむきあつて、ほおをゆびさして、おでこをさわつて、わらべうたをうたいながら遊んでいるので

かけまわるとき「ささら」（竹の先を細かくさいたもの）を持って、自分のまわりをたたきながらへびもまむしもどっけどけ、おいらは喜多見のやえもんだ。やりも刀も持つてるぞ」と声をそろえてかけずり回ったもんだ」

と話をしてくれました。やえもんという人の伝説があるのですが、この地域にはへび、まむしの類がたくさんいたのでしょう。そこには、やえもん伝説を生かした、人間の生活の知恵があるように思うのです。

やえもん伝説とは、むかしこの地のとの様子が狩りにでたとき、家来のやえもんが、えものを探しているとへびとししがあらそっているのであひ、ししを槍でつき、へびをにがしてやっただけです。その後へびはやえもんに恩をかえしたというのです。

以上のようなことから、「むかし」も「わらべうた」もそして伝説も、私はみんな民話というジャンルの中に入れて考えることにしたのです。そして、民話が語り伝えられているだけでなく、それは、その地方の生きた歴史であり、人間の生活そのものであると考えるのです。

したがって、日本人という人間をつくるのに、大変重要なものだったのではないかと考えるのです。

民話ブーム

近ごろ、よく聞くことばで「民話ブーム」といわれていますが、本当にそうでしょうか。たしかに本屋さんに行くとき、「〇〇の民話」とか絵本がたくさんならんでいます。学級の子どもも、松谷みよ子さんや大川悦生さんのむかしばなしの本をたくさん読んでいます。母親の集りに行っても、読書会に行っても、上記のような作家の人たちの本が読まれています。そして「民話って、おもしろいですね」とか「民話を研究しているのです」という声をききます。また、ある学校では、国語教科書にでている「一寸法師」や「かさじぞう」の文と、原話と称して、ある作家のかいた「一寸法師」や「かさじぞう」と文章をくらべて「どんぶらこっこ すっこっこ」の方がいいとかという批判をし、それが民話の研究のようにいい、発表することによって、民話ブームということばをマスコミにのせているのではないかと考えられるふしはありません。

私は作家の方々が書かれた、民話文学を否定するものではありません。作家の方々も、地方へでかけ、いろいろのまわりではなしを聞かれていることを知っています。そして、その語りでの生活をからだで感じ、からだでうけとめて作品として書かれていることも知っています。そして、その人たちの民話文学が民話ブームをよんでいることも事実でしょう。だからと言って、私はブームということばはあまり好きではないのです。

それよりも民話や、民話を語りつぐ姿や、民話で何を語ろうとしているのかというようなことを、本当のいみで定着させることだと考えるのです。

民話の心

むかしばなしに「たにしときつね」という話があります。うさぎとかめのような話ですが、たにしときつねが競走をします。スタートでたにしはきつねのしっぽにしがみつき、ゴールの近くできつねがうしろをふりかえったとたんにしっぽから離れてたにしが勝ったという話なのです。

この話でたにしがずるいと言えるでしょうか。小さい者が生きていくためのたくましい知恵だと思ふのです。自分の子どもが小さければ、知恵を働かせて生きていくのだよという願いをこめて語るでしょう。民話には、そういう民話の心のようなものがあるのです。

これは本当にあったことですが、富士男君というとても小さな子が学年で一番大きな昇君と相撲をとったとき、しきりに入って、にらみあったとき、急に目じりを両手でさげたのです。もちろん昇君は笑いだしました。そのときすかさず押しだしました。四十八手にはない「笑いだし」という手になるでしょう。このことは、「たにしときつね」の現代版と言えないでしょう。

か。

教師や母親が、民話文学でも、民話でも、そういういみで、深く民話をとらえて、子どもたちに語ってやれば、それは生活の中に生きていくと思ふのです。

おわりに

さいごに、都会でも農山村でもそうなのですが、最近テレビがどの家庭にも入り込み、家の中の対話がなくなってきたと言われています。

先日も福島県の農村に行ったとき、テレビがあるので子守りもみんなテレビのマンガにまかしてしまったので話を忘れてしまったよという、八十七歳のおばあちゃんにいました。私たちがほかけて行ったので十数年ぶりにおもいだして「むかし」を語ってくれたのですが、その家の中学生の孫が、はじめて聞く自分の家のおばあちゃんの話を感じてきていました。

いまからレパートリーをたくさんもつことは無理かもしれませんが、一つでも二つでも、これならできるといふ話を身につけて、子どもたちに語ってあげましょう。それは日本の文化財を発展させる未来の主人公のためになるのです。

(世田谷区立三宿小学校)